

福井県医師会

だより

第592号 平成22年(2010)10月



夕日に映える二重橋

鯖江市 清水 元博

表紙写真説明：夕日に映える二重橋

鯖江市 清水 元博

久しぶりに皇居・二重橋を訪れました。夕日を背に受けた伏見櫓、二重橋、そのシルエットを映したお堀のたたずまいが大変印象的でした。

皇居の入口には、皇居前広場側から見て、手前に「正門石橋」、奥に「正門鉄橋」という2つの橋があります。「二重橋」とは奥の鉄橋の呼称で、架け替え前の木造橋時代に橋桁が上下二段に架けられていたためこのように呼ばれています。

醫 縫 録

子ども救急医療電話相談 (#8000) について



福井県子ども療育センター所長 春 木 伸 一

少子化社会における「安心できる子育て」を目指して、様々な対策が講じられてきている。その一環として、①養育者の小児の急病に対する不安の軽減・解消と、②軽症小児患者の時間外受診を減らして、病院小児科医の負担を少しでも軽減する目的で、救急医療電話相談(#8000)が福井県では平成17年4月から開始された。県医師会が事務を担当し、県小児科医会の協力を得て夜間19時から23時まで小児科医が携帯電話を持ち、直接電話を受けることにした。開始当初平日夜間のみであったが、平成17年9月からは土日・祝日の夜間も実施するようになった。あらかじめ電話相談マニュアルを作成し、相談内容は記録票に記入するようになった。

初年度の相談件数は2年目の平成18年度の1,471件(1日平均4人)から年々増加し、平成21年度には3,603件(1日平均10名)となっている。相談時間帯は午後7時から8時の早い時間に多く、患児の年齢はいずれの年度でも4歳までが約80%を占めていた。相談者の約85%は母親であり、共稼ぎの多い福井県では多いのではないかと予想された祖父母からの相談は2%以下と少なかった。相談者の住所では小児人口1,000人当たりで見ると、嶺北地方の各市が20人台で、奥越地方は10人台と比較的少ない。嶺南地方は全体の約15%を占めていた。相談内容は発熱が約35%と多く、続いて嘔吐や外傷が7~8%であった。育児相談はほとんどなく、県民には本事業の趣旨がかなり理解されていると考えられた。対応内容では「助言・指導で解決」「翌日にかかりつけ医受診」が全体の約60%を占め、

ある程度時間外受診の抑制に寄与していると思われる。対応者側から見た相談者の満足度は、「納得した」が約85%であり、「あまり・まったく納得しなかった」は年間30件以下であった。

平成21年に相談者の割合が少ない地域の保護者へのアンケート調査を実施したが、事業の実施を「知っている」と答えた人は64%であり、利用したことがある人は21%であった。満足度では「十分・少し聞いた」という回答が81.5%に認められ、対応者側の感じたものと差が無かった。

電話相談担当者からは、アドバイスと診断・治療の区別がしにくいという意見や電話が遠いという苦情がたまにあり、最近は相談というよりも診てくれる医療機関をともかく教えてほしいという相談者が増えているとの指摘がある。現在40名の小児科医会会員が参加されており、これらの方々のおかげでこの事業が円滑に実施されてきたと感謝している。

平成23年度より嶺北地方を主とした1年365日夜間診療を行う小児救急急患センターが開設予定であり、この事業の在り方も変わっていく必要がある。今後は看護師が初めに相談に乗り、十分に対応しきれない場合小児科医の出番が来るということになるであろう。その他民間サービスの利用や、日本小児科医会が提唱している365日24時間体制で実施される「中央コールセンター」なども将来構想として考えられる。